

南 庄 遺 跡

—徳島家畜保健衛生所建替え工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年 3 月 (1989年)

徳島県教育委員会

序

本書は、徳島家畜保健衛生所建替え工事に伴う事前調査として、徳島県教育委員会が実施した南庄遺跡（徳島家畜保健衛生所地区）に関する報告書であります。

南庄遺跡は、庄遺跡・鮎喰遺跡とともに弥生時代を中心とする大規模な集落遺跡群を形成している遺跡であります。今回の調査区は遺構・遺物量とも少なく、集落縁辺部の様相を示していますが、南庄遺跡の北限を知るうえで重要な資料となるものと思われまゝ。本書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深め、さらには今後の研究の一助ともなれば幸甚に存じます。

最後になりましたが現地での発掘調査、報告書の作成にあたって、関係各位から賜りました多大の御指導・御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

徳島県教育委員会

教育長 松本 富夫

例 言

1. 本書は、徳島家畜保健衛生所建替え工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、徳島県農林水産部畜産課の依頼を受け、徳島県教育委員会文化課が行った。
3. 発掘調査は、昭和63年6月1日から昭和63年8月31日まで行い、整理作業を昭和63年9月1日から昭和63年10月31日まで行った。
4. 本書で、用いた絶対高は標高を表し、方位はすべて磁北である。
5. 遺構の略号は、SD-溝跡、SK-土坑、SX-不明遺構とする。
6. 土色については、「新版標準土色帳」1987年版によった。
7. fig-1の地形図は、徳島市発行2,500分の1「徳島市全図(33)」を、
fig-2の地形図は、徳島市発行10,000分の1「徳島市全図・5」を転載したものである。
8. 今回の調査において、徳島市教育委員会・瀧山雄一氏には、本書Iの周辺の遺跡調査地を教えていただくとともに、発掘から整理調査にあたり、御教示を受け、誌上をもってお礼を申し上げる次第であります。
9. 今回の調査において、次の方々の御指導、御協力を得た。(敬称略)
羽山 久夫・福家 清可・島巡 賢二・菅原 康夫・湯浅 利彦・久保臨美朗・
早瀬 隆人・扶川 道代・大村 祥之・赤沢 恵美
徳島家畜保健衛生所職員・発掘調査作業員
10. 調査は、次の組織で行った。

調 査 主 体 徳島県教育委員会文化課

課 長 三舟 信司

課 長 補 佐 岡野 嘉夫

庶 務 係 長 天野 尊温

庶 務 係 主 事 大八木芳子

文化財保護班長 河野 良昭

埋文担当デスク 後藤 忠雄

調査担当 主事 大西 浩正

研修生 森 直樹

文化財調査員 高岡 裕・馬場 史子・細井 康宏

11. 本書は、森が編集した。執筆は、本文Ⅳを高岡が、その他を森が担当した。

12. 観察表は高岡が作成した。

本文目次

	頁
I 遺跡の位置と周辺の調査地区.....	1
II 調査に至る経緯と経過.....	3
調査日記抄	
III 基本的な層序.....	5
IV 遺構と遺物.....	7
V まとめ.....	16

挿 図 目 次

	頁
fig-1 南庄遺跡—徳島家畜保健衛生所内調査位置図—	1
fig-2 庄地区弥生時代の遺跡調査地分布図	折り込み
fig-3 試掘調査地点図	3
fig-4 基本土層図	5
fig-5 遺構配置図	6
fig-6 SK-101 実測図	7
fig-7 SK-102 実測図	7
fig-8 SD-102, 103, 106 実測図	折り込み
fig-9 SD-101, 104, 105 実測図	折り込み
fig-10 SD-102, 103 出土土器	8
fig-11 SD-102 出土の石器	8
fig-12 SD-101 出土土器	9
fig-13 SD-101 出土の石器	9
fig-14 SD-104 出土土器	10
fig-15 SD-104 出土の石器・鉄器	12
fig-16 SX-101 実測図	13
fig-17 SX-102 実測図	13
fig-18 暗褐色粘質土層出土の須恵器	13
fig-19 各層出土の石器・土錘	15

図版目次

- P L. 1 上 遺構検出状況
中 SD-101, 104, 105 検出状況
下 SD-102, 103 検出状況
- P L. 2 上左 SX-101, 102 検出状況
上右 SD-102 検出状況
下 SD-106 (手前) 検出状況
- P L. 3 上 SK-102 検出状況
下 SK-102 中央部
- P L. 4 上 SD-101 土器出土状況
中 SD-104 土器出土状況
下 SD-101 土器出土状況
- P L. 5 上 SD-103 土器出土状況
中 SD-101 土器出土状況
下 石製品出土状況
- P L. 6 出土遺物①
- P L. 7 出土遺物②
- P L. 8 出土遺物③

I. 遺跡の位置と周辺の調査地区 (fig - 1・2)

南庄遺跡(徳島家畜保健衛生所地区)は、徳島市南庄町5丁目に位置する。(fig-1) 本遺跡は、神山町に源を持つ鮎喰川の右岸にあり、川の堆積作用による沖積平野上の標高5m~6mに所在し、北東に向かってゆるやかに傾斜している。

この鮎喰川流域の両岸には数多くの遺跡が存在しているが、今回は右岸側の庄地方の弥生時代に関する遺跡の調査地点に限り述べることにする。(fig-2)

1は、⁽¹⁾徳島大学蔵本校舎内での調査で総数20基以上の土壌墓にまじり、箱式石棺墓2基・環状墓などを検出している。2は、⁽²⁾弥生時代前期中頃の壺棺墓を1基検出している。3は、⁽³⁾弥生時代の自然河道を検出し、木製品が出土し、中でも木偶の出土は有名である。4は、⁽⁴⁾庄遺跡の調査のさきがけとなった調査で、蔵本球場改築工事に土器片が発見され、三塁側スタンド付近で柱穴や竪穴の落ち込みが確認され、また本館東側で土壌などを検出した。6・7においては、溝状遺構を検出している。8においては⁽⁵⁾弥生時代後期の溝を検出している。9は、⁽⁶⁾土壌・溝などを検出している。10は、⁽⁷⁾国道192号線拡張工事に伴う調査で溝跡などを検出している。11では、⁽⁸⁾小判形の中期土器溜り土壌を検出している。13は、⁽⁹⁾5回におよぶ調査で県下最大級の弥生集落が検出されている。15では、⁽¹⁰⁾弥生時代前期の土壌・井戸・中期の竪穴式住居跡、後期の竪穴式住居跡2・庄内式併行期の竪穴式住居跡9を検出している。17では、⁽¹¹⁾溝・土壌を検出し、19においては、⁽¹²⁾中・後期の竪穴式住居跡・土壌を検出



fig-1 南庄遺跡徳島家畜保健衛生所内調査位置図

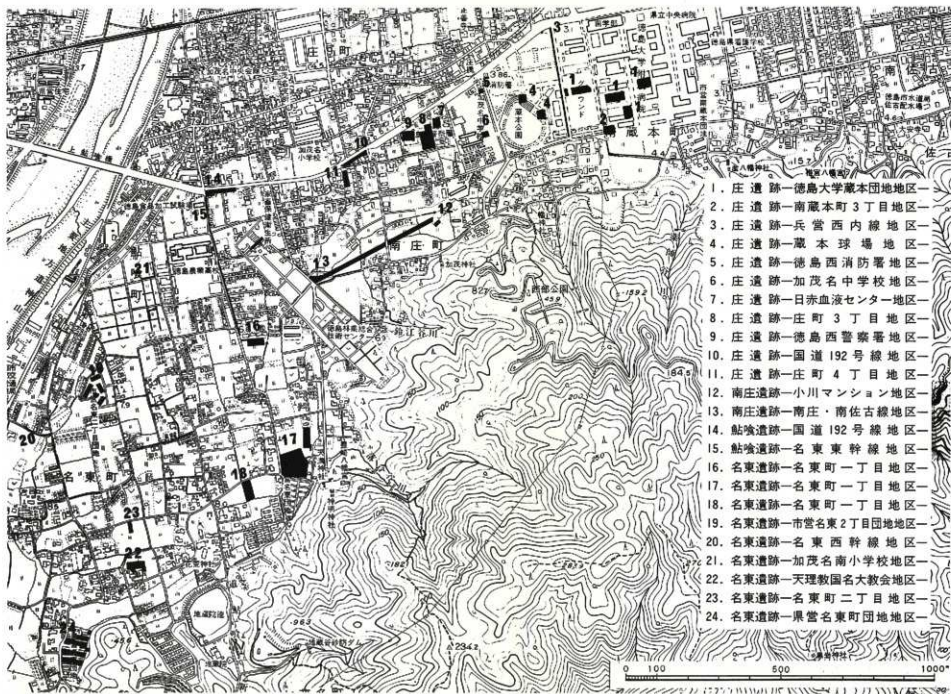


Fig-2 庄地区弥生時代の遺跡調査地分布図

している。20では、⁰⁹陸橋部をもつ方形周溝墓の可能性のある遺構を検出している。22では、⁰⁹土壇より六区画偏平鈕式袈裟摩文銅鐸を出土している。24では、⁰⁹弥生時代中期から後期前半の集落が検出されている。

このように庄地方は、弥生時代の遺跡が多く存在し、南庄遺跡においても集落群を中心として検出されている。

II. 調査に至る経緯と経過

(1) 試掘調査 (fig-3)

かねてから老朽化のすすんでいた徳島家畜保健衛生所の改築工事に伴い、当地の遺跡の有無を確認するため、徳島県教育委員会文化課は、畜産課の依頼により、昭和62年4月27日(第1回目)、9月7日(第2回目)と試掘調査を行った。

その結果、黒褐色土を除去した黄褐色土上面で不整形の遺構1ヶ所と杭跡数ヶ所を確認し、土師質の土器細片を出土した。

この黒褐色土は、近接する名東遺跡・南庄遺跡の遺物包含層と把握されており、当地区も、弥生時代～古墳時代の遺構があると考えられた。

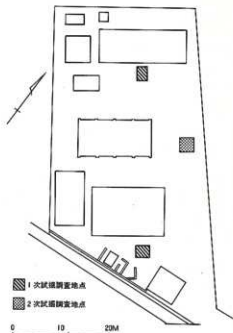


fig-3 試掘調査地点図

(2) 発掘調査

試掘調査の結果に基づき、本館建設予定地約450㎡の調査面積を昭和63年6月1日から同年8月31日まで発掘調査を開始した。

調査地区周辺は住宅密集地であり、敷地内既存の建物との関係から調査区を2分割とし、排土を調査区内で処理するという形で行った。

以下、調査日誌により経過の概略を述べる。

- 6月3日 発掘調査用具現地へ搬入。
- 4日 安全壁作成、レベル移動。
- 6日 調査区北半分側重機掘削。
- 7日 西壁側先行トレンチ掘削開始。
- 8日 先行トレンチ内暗褐色包含層を確認する。
- 9日 調査区の荒掘り開始
- 10日 オリーブ褐色粘質土を除去する。須恵器、土師器片を出土する。

- 6月14日 北壁中央部に坪掘りをし、土層堆積状況を観察する。
- 15日 包含層上面まで荒掘り完了。
- 17日 調査区配置図1/100平板実測。サヌカイトの石鉄出土。
- 22日 調査区中央部に先行トレンチ。
- 28日 オリーブ褐色粘質土上面での遺構確認。
- 30日 排水。調査区中央部に溝状の落ち込みを確認。
- 7月2日 SD-101 を検出。1/20平面図を作成。
- 4日 住居跡状遺構(SX-101, 102)完掘。
- 5日 調査区東側で溝状遺構2条確認。
- 6日 1/10土層図完成。森への現場引き継ぎ。
- 12日 南半分調査区重機掘削。
- 19日 重機表土掘削翌日より長雨に見まわれ、本日午後より荒掘りが開始できる。
- 25日 調査区杭打ち。
- 29日 暗褐色粘質土(包含層)掘り下げ。須恵器・土師器片出土。
- 8月3日 溝状遺構(SD-104)検出。鉄製品出土。
- 8日 SD-101(南側部分)、SD-103, 105 検出。
- 17日 盆休暇中の大雨のため、調査区内プール状になる。
- 22日 遺構面写真撮影。
- 25日 土坑状遺構(SK-102)を確認。
- 26日 SK-102 で炭化物、焼土確認し、掘り下げ。
- 27日 遺構面掘り下げ。完掘する。
- 29日 現場埋め戻し。引越し準備。
- 30日 引越し。
- 31日 遺物整理。
- 9月1日 整理作業を開始する。
- 10月31日 整理作業を終了する。

Ⅲ. 基本的な層序 (fig-4)

調査区の北側中央部の断面である。

まず、地表から、40cm程の盛土である。以下、第1層と第2層は建物建設時までの耕作土である。第2層で、標高5mを計る。第3層は、他の場所より運びこまれたと思われる庄地方の包含層を含む客土である。第4層は、幕末頃の耕作土であろうと思われ、灰色粘質土である。第5層は、第4層と同じ、灰色粘質土であるが、第4層と比べるとやや色が暗い。第6層は上層よりオリープがかって、やや明るくなっている。第7層は、第5層と同一色である。第8層は、第6層と同じ灰オリープ粘質土である。

第9層は、庄地方の包含層で、遺物の出土を見た。第10層も遺物を含む層で、第9層とは、時期差のある包含層である。第11層は、黄褐色粘質土で、この面で遺構を確認した。第12層は、にぶい黄色粘質土で、層厚9cmと薄い。第13層から第16層までは黄褐色粘質土で小石を含む。第17層はオリープ褐色粘質土で礫を含む。第18層は、灰色土で砂礫であった。

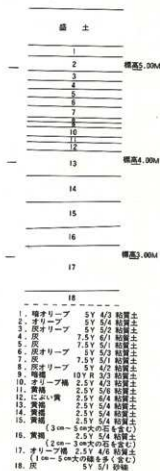


fig-4 基本土層図

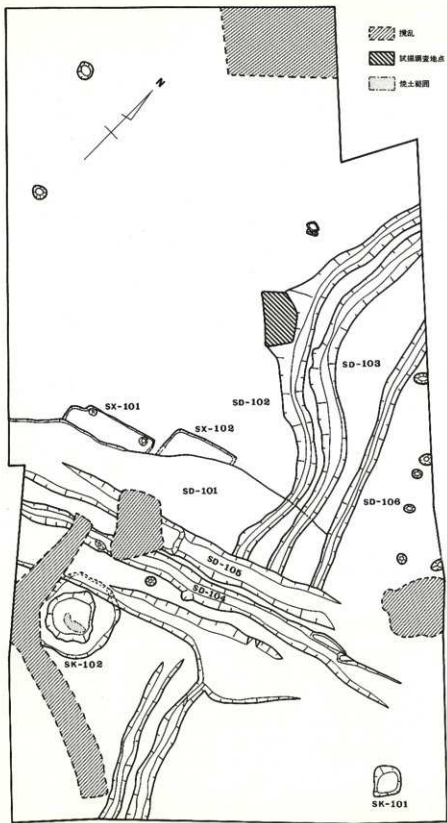


fig-5 遺構配置圖

IV. 遺構と遺物

本調査区で検出された遺構は、土坑状遺構2ヶ所、溝状遺構6ヶ所、不明遺構2ヶ所である。

土坑 (SK-101) (fig-6)

調査区の東隅で検出された土坑である。やや丸みをもつ方形を呈し、長軸1 m 10cm、短軸1 m、深さ10cmを計る。断面は北から南に向ってゆるやかに傾斜している。遺物の出土は見られなかったが、調査区内土層第9層の暗褐色粘質土層と同様の埋土から、古墳時代以降の年代が推定される。

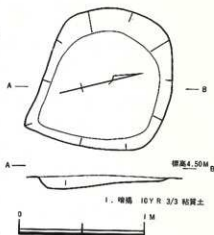


fig-6 SK-101 実測図

土坑2 (SK-102) (fig-7)

調査区の南側に溝1に切られて検出された焼土層である。平面プランは、長軸3 m 20cm、短軸2 m 20cmの隅丸方形を呈し、中央部に長軸2 m 20cm、短軸1 m 10cmの掘り込みがある。底面は、北側から、ゆるやかに落ち込み、南側は垂直に落ち、中央部で、ゆるやかに落ち込む。埋土は、1層・2層はふい黄褐色、3層は焼土層である。各層に炭化物が見られた。年代決定は困難であるが、弥生時代中期前半の可能性も考えられる。また、隣接する南庄遺跡(南庄・南佐古線)の調査において、同様な焼土層が検出されている。

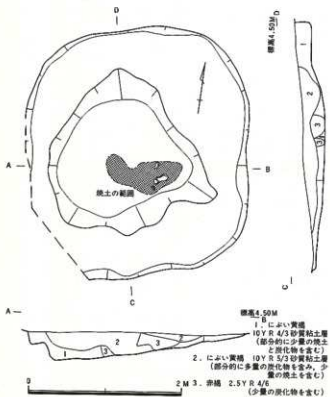


fig-7 SK-102 実測図

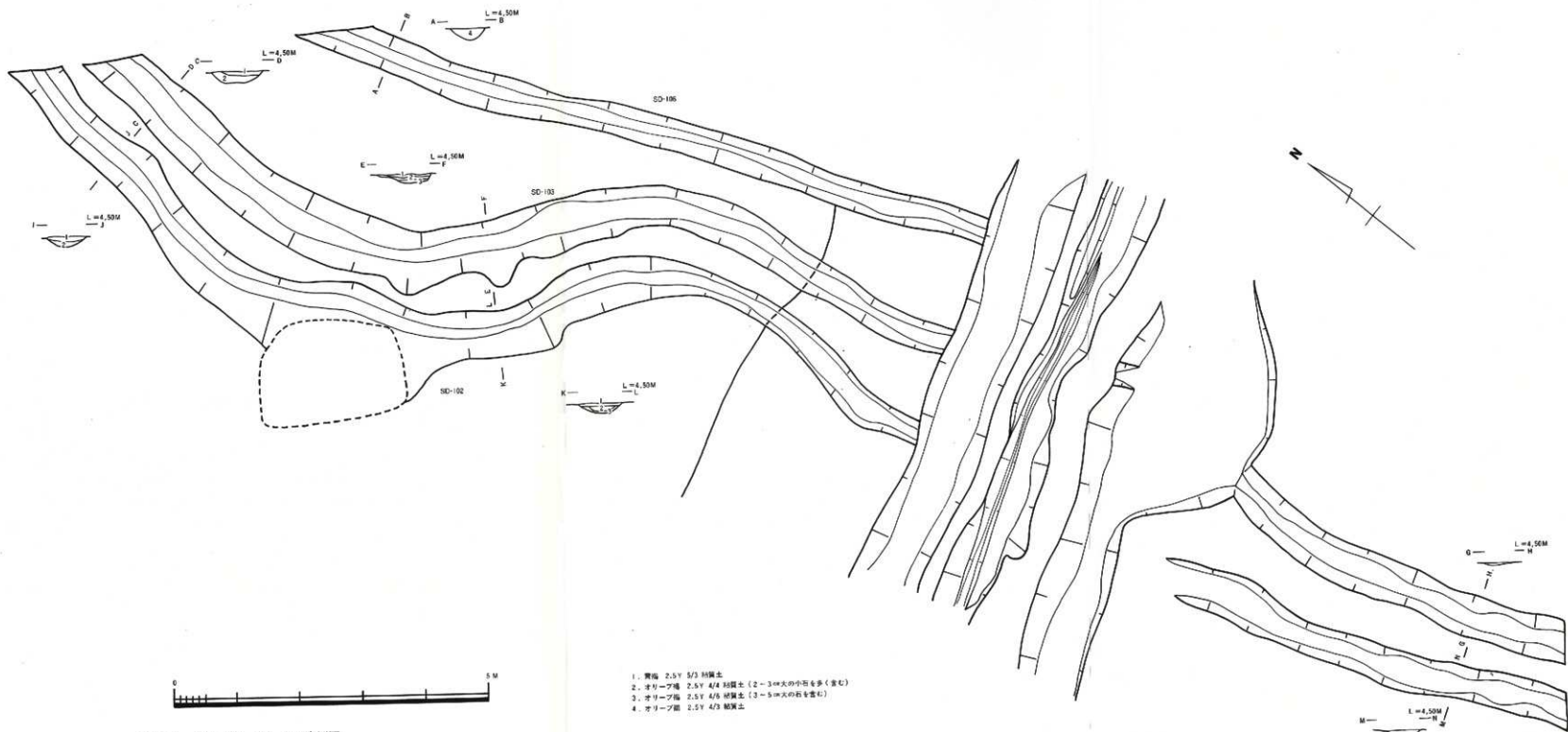


fig-8 SD-102, 103, 106 実測図

1. 寛幅 2.5Y 5/3 枘算止
2. 字引一ツ端 2.5Y 4/4 枘算止 (2-3中丸の中程を多(常七))
3. 字引一ツ端 2.5Y 4/6 枘算止 (3-5中丸の右を常七)
4. 字引一ツ端 2.5Y 4/3 枘算止

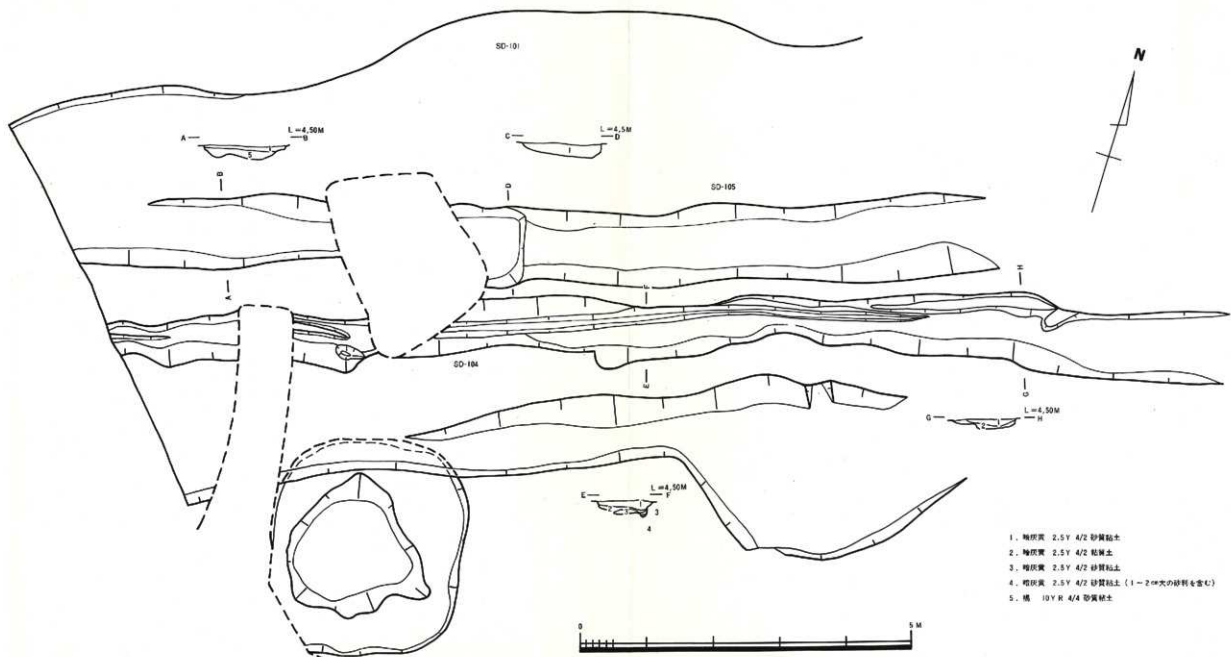


fig-9 SD-101, 104, 105 实测图

溝2 (SD-102) (fig-8)

調査区を南北に走向する溝である。溝幅は、60cm～70cm、深さは南側で7cm、北側で17cmを計る。断面はU字形を呈し、3層に分層される。1層は黄褐色粘質土、2・3層は、オリープ褐色粘質土で、2～5mm大の砂礫を含む。遺物は2層中に多く見られた。時期としては弥生時代中期前半である。

溝2 出土の土器 (fig-10)

1の口縁部は、体部から水平方向に屈曲する。端部は丸くおさめ、刻目を施している。体部外面はタテ方向のハケ、内面はヨコ方向のハケの後、タテ方向に幅広のミガキ調整を行う。口縁部はヨコ方向のハケ目調整である。2・3は平底の底部である。2は外面にタテ方向のハケを施す。2点とも胎土中に多量の砂粒を含んでいる。

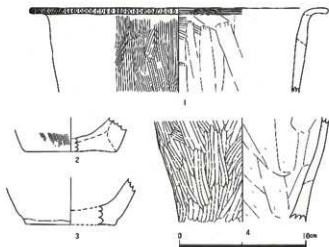


fig-10 SD-102, 103 出土土器

溝2 出土の石器 (fig-11)

1はスクレイパーである。板状の剥片の荒い調整が施され、刃部を形成している。

溝3 (SD-103) (fig-8)

溝2と並行に、南北に走向する溝である。溝幅は60cm～80cm、深さは南側で14cm、北側で17cmを計る。断面はU字形を呈し、溝2と同様に3層に分層できる。溝2と3は、規模・埋土ともほぼ同様なことから、何らかの意図をもつと考えられる。弥生時代中期前半である。

溝3 出土の土器

4は底部に近い裏の体部である。外面はミガキ、内面

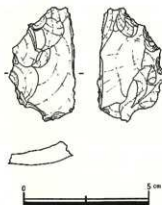


fig-11 SD-102 出土の石器

は幅広のミガキである。この他図示できなかつたが、刻目をもつ裏の口縁部なども出土している。

溝1 (SD-101) (fig-9)

幅約7m、深さ3cmを計り、溝4・溝5が埋没する段階で流れた自然流路である。

溝1出土の土器 (fig-12)

5は裏で口縁部は「く」の字状に外反し、端部をわずかにつまみ上げている。口縁部に擬凹線を施し、内面上方に指頭圧痕、下半ケズリ、外面はハケ目調整を施している。



fig-12 SD-101 出土土器

溝1出土の石器 (fig-13)

2～4は、サヌカイト製の石鏃である。2は凹基無茎式であり、側辺が直線的にのび、基辺の凹みは、0.34cmを計る。逆刺部を古く欠損する。3は凸基有茎式である。先端部は鋭く、側辺は直線的で、逆刺部は角をもつ。4は凸基有茎式である。柳葉形で両側より調整剝離を施している。先端部を古く欠損する。

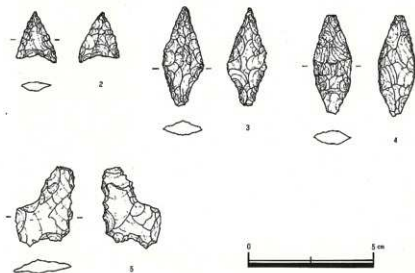


fig-13 SD-101 出土の石器

溝4 (SD-104) (fig-9)

東西方向に流れる溝で、東側で取束している。幅70cm~90cm、深さは東側で3cm、西側で14cmを計る。断面は逆台形を呈し、4層に分層できる。1・3層は、暗灰黄色の砂質粘土、2層は暗灰黄色の砂質土、4層は暗灰黄色の砂質粘土で1~2cm大の砂利を含んでいる。

溝4出土の土器 (fig-14)

壺(6・7・8・9) 6は屈曲して大きく外方に開き、口縁端部を上方につまみだす。7は口縁部を外側に開き屈曲する。端部は方形状におさめる。8は外側に直線的に開き口縁部である。9は内外面ともにハケ目調整を施している。

甕(10・12) 10は体部から屈曲して「く」の字状に外反し短い口縁をもつ。口縁部内面ヨコ方向のハケ目調整。体部境に指頭圧痕がみられ、内面ハケ目調整、下半はケズリである。外面はタタキが見られる。12は「く」の字状に外反し、口縁部をわずかに肥厚させながら、端部を方形状におさめている。

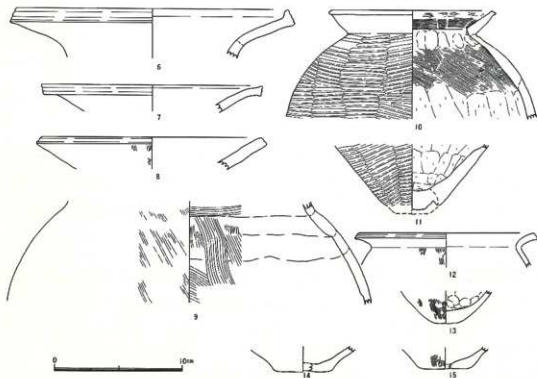


fig-14 SD-104 出土土器

鉢13は丸底の鉢で、内面指頭圧痕がみられ、外面はハケ目調整である。

底部11・14・15は内面ケズリで、外面は右上がりのタタキ目が見られる。甕の底部である。15は外面にハケ目調整が見られる。

溝4 出土の石器 (fig-15)

6はサヌカイト製の石鏃である。円基無茎式で、先端部は鋭く、側辺は直線的にのびる。7・8は剥片である。9～11は、頁岩製の棒状石製品である。打痕、調整等は観察できなかったが、用途不明の石製品として参考までに加えておきたい。

溝4 出土の鉄器 (fig-15)

12は柳葉形の鉄鏃である。両面に稜は観察できなかった。時期は弥生時代後期後半と考えている。弥生時代後期後半～庄内併行期の徳島県における出土例は、徳島市南庄遺跡、⁰⁷板野郡黒谷川郡頭遺跡、⁰⁸三加茂町稲持遺跡などで出土例は少ない。13は棒状の鉄製品で形態は不明である。

溝5 (SD-105) (fig-9)

東西に走向する溝である。溝幅は1m、中央部で深さ10cmを計る。東西端で収束し、段がついている。埋土は暗灰黄色粘質土である。無遺物である。

溝6 (SD-106) (fig-9)

調査区東側で、溝5に切られて検出された溝である。溝幅は50cm、深さは北側で14cm、南側で5cmを計り、南から北に流れていたと思われる。埋土は、オリーブ褐色粘質土。無遺物である。

不明遺構 (SX-101) (fig-16)

SD-101に切られる形で検出した。住居跡状の遺構である。無遺物であった。一辺3m 60cm、最深3.8cmを計る。ピット5ヶ所、周溝も検出されたが浅く、住居跡としての決めてを欠いている。ここでは、住居跡状の遺構としてとらえておきたい。

不明遺構 (SX-102) (fig-17)

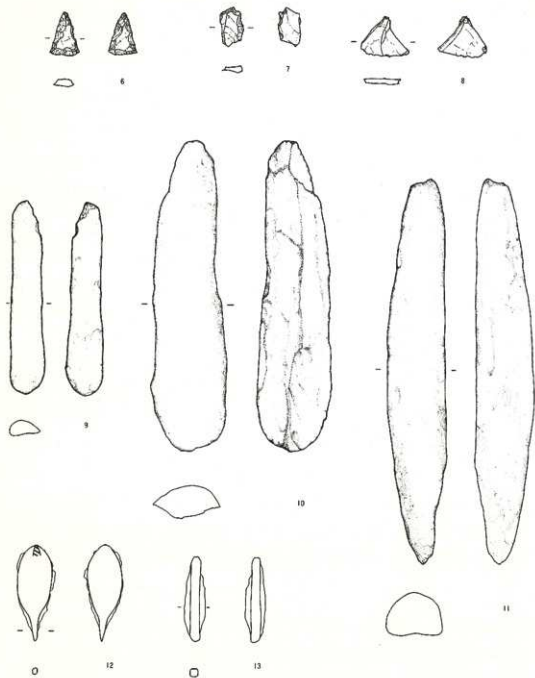


fig-15 SD-104 出土の石器・鉄器

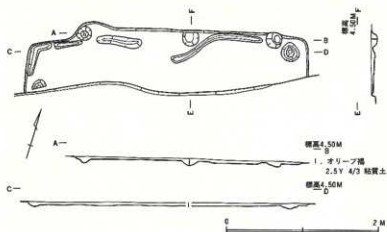


fig-16 SX-101 実測図

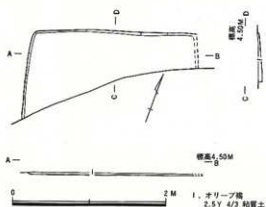


fig-17 SX-102 実測図

SD-101に切られ、SX-101に隣接して検出された。一辺2m10cm、最深3.0cmという浅い遺構である。ビット等も検出できず、土器も年代決定できない細片を一点を検出したにすぎない。不明遺構としてとらえておく。

暗褐色粘質土層出土の須恵器 (fig-18)

杯蓋 (16・17)

16は回転によるヘラケズリで、天井部を平坦におさめている。17は端部を丸くおさめ、16・18とは時期差がある。18の立ち上がり部は内傾し、受け部を丸くおさめている。6世紀後半と思われる。

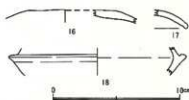


fig-18 暗褐色粘質土層出土の須恵器

オリーブ褐色粘質土層出土の石器 (fig-19)

17~19は、サヌカイト製の石鏃である。17は凹基無茎式である。側辺がふくらみもち、細かな刻離が見

られる。A面、B面とも大剝離面を残す。18・19は凸基有茎式である。18は両面に大剝離面を残す。19は側辺から基部に至る部分に角をもつ。20は側辺に細かな調整刻離を行なっ

ている。A面はネガティブな面をもち、B面はポジティブな面をもつ。

黄褐色粘質土上面出土の石器 (fig-19)

14~16はサヌカイト製の石鏃である。14は凹基無茎式である。小型の石鏃で先端部と基部を古く欠損する。15は平基無茎式である。先端から側辺にかけて、直線的にのび、基部は外側に開く。16は凸基無茎式である。細身の石鏃で、側辺はやや丸みもち、B面に大剝離面が残る。

荒掘り中出土の遺物 (fig-19)

21・22はサヌカイト製の石鏃である。21は凸基有茎式で、両面に大剝離面を残し、荒い調整である。先端を古く欠損する。22は凸基有茎式で、上半分を欠損する。

23・24は管状土鏃である。

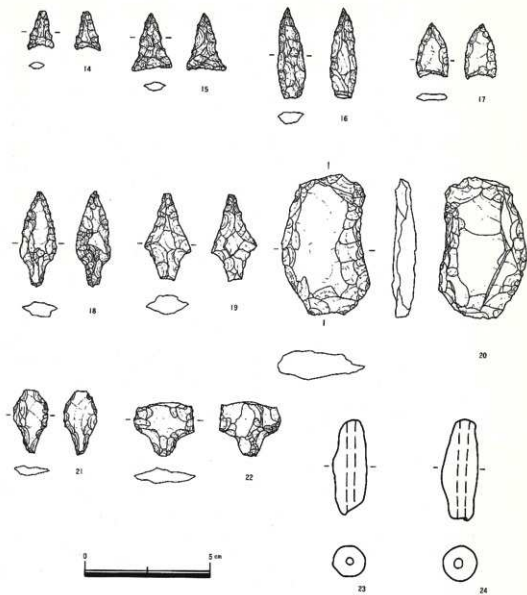


fig-19 各層出土の石器・土錘

V. ま と め

南庄遺跡の発掘調査における成果は、以上述べてきた通りである。今回の調査においては、遺構、遺物とも少なく、集落の縁辺部であろうと思われる。しかし、庄地方の遺跡密集地での今回の調査のこの徳島家畜保健衛生所地区が、隣接する徳島市教育委員会の調査で確認された南庄遺跡に含まれる場所であったとの意義は大きい。出土した遺物も弥生時代中期前半から古墳時代初頭であり、鮎喰川右岸の遺跡範囲の決定の一助となるであろうとしてまとめとしたい。

註

- (1) 菅原康夫 日本の古代遺跡—徳島— 保育社 1988
- (2) 徳島市教育委員会 第7回埋蔵文化財資料展パンフレット 1986
- (3) 徳島市教育委員会 第6回埋蔵文化財資料展パンフレット 1985
- (4) 徳島県教育委員会 徳島県文化財調査概報 昭和53年度
- (5) 徳島市教育委員会 第8回埋蔵文化財資料展パンフレット 1987
- (6) 徳島県教育委員会 徳島県文化財調査概報 昭和54年度
- (7) 徳島県教育委員会 庄・鮎喰遺跡報告書 1985
- (8) 註(5)と同じ
- (9) 徳島市教育委員会 第9回埋蔵文化財資料展パンフレット 1988
- (10) 註(2)と同じ
- (11) 註(2)と同じ
- (12) 徳島市教育委員会 第1回埋蔵文化財資料展パンフレット 1980
- (13) 註(5)と同じ
- (14) 註(5)と同じ
- (15) 徳島県教育委員会 名東遺跡4次現地説明会資料 1988
- (16) 南庄遺跡—南佐古・南庄線—発掘現場において、森が突見した。
- (17) 徳島市教育委員会 瀧山雄一氏御教示による。
- (18) 徳島県教育委員会 黒谷川郡頭遺跡報告書 1986
- (19) 徳島県教育委員会 湯浅利彦氏御教示による。

南庄遺跡（徳島家畜保健衛生所地区）土器・土錫観察表

器種	番号	流量(cm)	形態	技法	色調	出土層位	備考
甕	1	復元口径 23.6 残存高9.7	口縁部は体部から水平に近く起曲する。 口縁端部は丸くおさめ、刻みを施す。	口縁部内面ヨコ方向のハケ。 体部外面タテ方向のハケ、指圧痕。 体部内面幅広いハケ後、タテ方向のミガキ。	外面 淡茶褐色 内面 明赤褐色		胎土中に1~4mm大の石英・片岩を多く含む。
底部	2	底部7.2	平底。	外面タテ方向のハケ (10条/cm)	明赤褐色	SD-102	胎土中に3mm大の石英・片岩を多量に含む。
底部	3	復元直径 7.0	平底。	外面ミガキ。	外面淡褐色 内面 にふい褐色	SD-102	胎土中に1~4mm大の石英を多く含む。
甕	4		ななめ方向にのびる体部。	体部外面不定方向のミガキ 体部内面ミガキ。	外面明褐色 内面明褐色	SD-103 2層	胎土中に1~4mm大の石英を多く含む。
甕	5	口径13.6 残存高6.8	口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁端部をつまみ上げる。	口縁端部二条の縦凹線を施す。 口縁部内外面ヨコ方向のナデ。 体部外面タテ方向のハケ。 体部内面上方・指圧痕。 下方・ケズリ。	外面褐色 内面褐色	SD-101	胎土中に6mm大の石英、2mm大の片岩を含む。
壺	6	口径21.3	口縁部は屈曲して、大きく外方向へひらく。 口縁端部上方に積み上げる。	口縁端部三条の縦凹線を施す。 内外面ヨコ方向のナデ	淡赤褐色	SD-104	胎土中に1~4mm大の石英・片岩を含む。
甕	7	口径17.4	口縁部は方形状におさめ、口縁端部はわずかに上下に拡張する。	口縁端部二条の縦凹線を施す。	明赤褐色	SD-104	胎土中に5mm大の石英・片岩を含む。
壺	8	復元口径 17.2		口縁端部一条の縦凹線を施す。 内外面割離。 外面タテ方向のハケの残跡。	淡赤褐色	SD-104	胎土中に片岩を含む。
甕	9			体部外面ナナメ方向のハケ、タタキ 体部内面タテ方向・ナナメ方向のハケ(6条/cm)	外面明褐色 内面 にふい褐色	SD-104	胎土中に3mm大の石英・片岩を含む。
甕	10	復元口径 12.6	口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁端部は方形状におさめ、下端をわずかにつまみ出す。	外面やや右下りのタタキ (3条/cm) 口縁部内面ヨコ方向(右→左)の細いハケ(12条/cm) 体部内面の上方指圧痕、ナナメ方向の細いハケ(12条/cm) 下方ケズリ。	淡茶褐色	SD-104	胎土中に3mm大の石英・片岩を含む。
底部	11	底径不明		体部外面右上りのタタキ 体部内面タテ・ヨコ方向のケズリ。	淡赤褐色	SD-104	胎土中に8mm大の片岩を含む。
甕	12	復元口径 13.8 残存高2.7	口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁端部は方形状におさめ、下端をわずかにつまみ出す。	口縁端部に二条の縦凹線。 口縁部内外面ヨコ方向のナデ。 体部外面タテ方向のハケ。	赤褐色	SD-104	胎土中に1mm大の石英・片岩を含む。
鉢	13	復元直径 2.0	丸底	外面タテ方向のハケ。 内面指圧痕。	外面灰黒色 内面 にふい褐色	SD-104	胎土中に石英・片岩を含む。

器種	番号	流量(cm)	形態	技法	色調	出土層位	備考
底部	14	底径4.5	平底	内面ケズリ。	外面 にふいろ褐色 内面灰褐色	SD-104	粘土中に1-4mm大 の石英・片岩を含む。
底部	15	復元底径 4.1	平底	外面タテ方向のハケ。 底面ハケ。 内面ケズリ。	外面にふい ろ褐色 内面褐色	SD-104	粘土中に6mm大の片 岩を含む。
須恵器 蓋	16		天井部は平皿	外面回転ヘラケズリ。 内面回転ナデ。	外面灰赤色 内面灰白色	褐色色粘 質土層第 9層上面	粘土中に1mm大の石 英粒を含む。
須恵器 蓋	17		口縁端部を丸くおさめる。	内外面回転ナデ。	外面灰色 内面明灰色	褐色色粘 質土層第 9層上面	粘土中に2mm大の石 英粒を含む。
須恵器 杯身	18		立ち上がり部は内傾する。 受け部は丸くおさめ、水平 にのびる。	内面ヨコ方向のナデ。	明灰色	褐色色粘 質土層第 9層上面	焼成良好。
土師	23	現長3.8 最大厚1.3 重量g6.7	管状土師		明赤褐色	荒掘り	一部欠損。 粘土中に砂粒を含む。
土師	24	現長4.1 最大厚1.5 重量g6.1	管状土師		淡黄褐色	オリーフ 褐色粘質土 層第10層	粘土中に砂粒を含む。

南庄遺跡（徳島家畜保健所内）石器計測値表

番号	出土層位	現長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	SD-102	45.3	25.4	8.4	9.6	サヌカイト	
2	SD-101	20.8	15.4	3.4	6.0	＃	無蓋
3	SD-101	39.0	16.2	5.5	2.5	＃	有蓋
4	SD-101	39.8	14.6	5.5	3.1	＃	有蓋
5	SD-101	31.2	23.9	5.2	2.7	＃	
6	SD-104	16.8	11.2	2.9	0.5	＃	無蓋
7	SD-104	15.3	8.1	2.8	0.3	＃	
8	SD-104	15.8	18.2	1.9	0.6	＃	
9	SD-104	76.5	14.5	6.0	9.5	頁岩	
10	SD-104	123.0	29.5	13.0	56.9	＃	
11	SD-104	153.0	22.5	17.5	75.5	＃	
14	黄褐色粘質土層 第11層 上面	15.5	10.0	2.5	2.5	サヌカイト	無蓋
15	黄褐色粘質土層 第11層	22.8	15.5	3.5	0.7	＃	無蓋
16	黄褐色粘質土層 第11層 上面	26.0	10.9	4.3	1.85	＃	無蓋
17	オリーブ褐色粘質土層 第10層	22.2	12.3	2.9	0.95	＃	無蓋
18	オリーブ褐色粘質土層 第10層	39.0	15.0	7.0	2.6	＃	有蓋
19	オリーブ褐色粘質土層 第10層	34.0	18.3	7.3	2.6	＃	有蓋
20	オリーブ褐色粘質土層 第10層	56.0	33.0	11.9	24.1	＃	
21	泥振り	25.2	13.9	3.8	1.1	＃	有蓋
22	泥振り	21.1	23.9	5.9	2.7	＃	有蓋

南庄遺跡（徳島家畜保健所内）金属器観察表

番号	出土層位	現長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考
12	SD-104	38.0	14.0	4.0	5.6	鉄	有蓋三角形式の押差式
13	SD-104	34.0	3.0		2.1	＃	

圖 版



遺構検出状況



SD-101・104・105検出状況



SD-102・103検出状況



SX-101・102検出状況



SD-102検出状況



SD-106(手前)検出状況



(SK-102)検出状況



(SK-102)中央部



SD-101土器出土状況



SD-104土器出土状況



SD-101土器出土状況



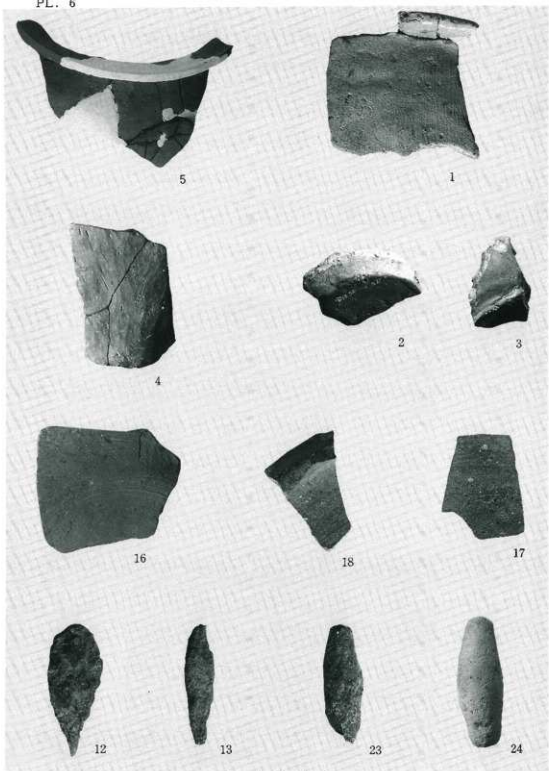
SD-103土器出土状況



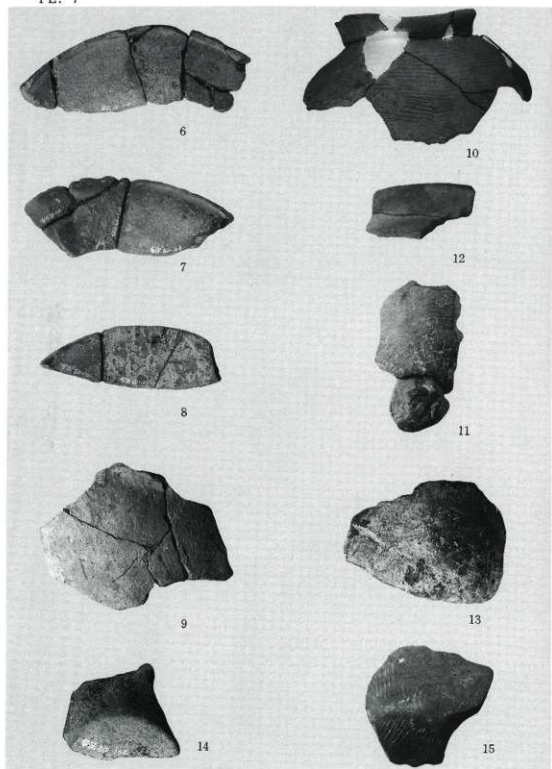
SD-101土器出土状況

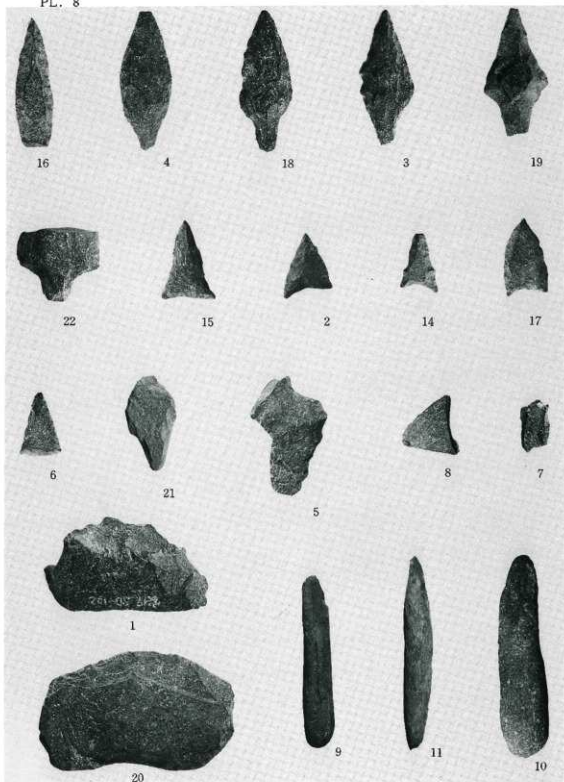


石製品出土状況



出土遺物 ①





徳島家畜保健衛生所建替え工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年度
(1989)

発行 平成元年3月31日
編集 徳島県教育委員会文化課
発行 徳島県教育委員会
印刷 徳教育出版センター